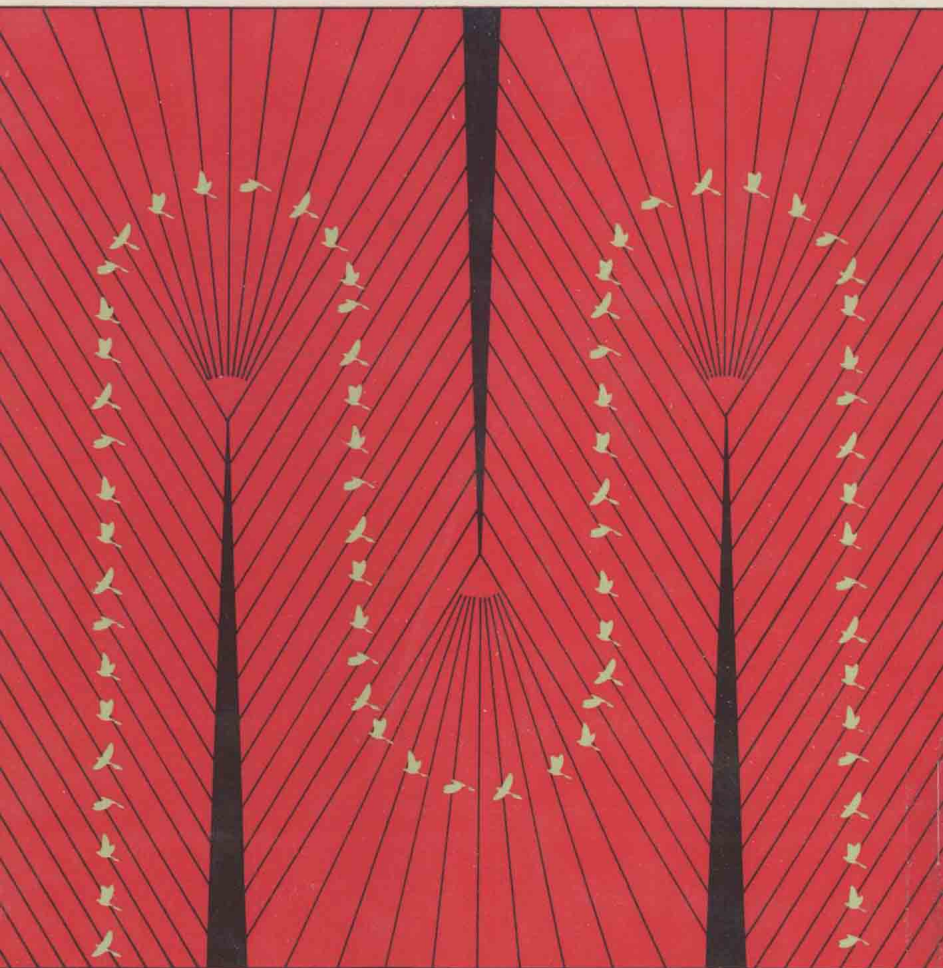


酷薄な伴侶との対話

日記と現代作家

エリアス・カネッティ，他

岩田行一／古沢謙次訳



訳者紹介

岩田行一 (いわた こういち)

東京大学独文科卒業。東京都立大学助教授。

訳書：E. カネッティ『群衆と権力』（上・下），『マラケシュの声』，『断想 1942-1948』，『救われた舌』，『耳証人』

古沢謙次 (ふるさわ けんじ)

東京大学独文科卒業。早稲田大学教授。

訳書：H. マイヤー『ハプニングと沈黙』；
J. クラウス『現代芸術の膨張』（共訳）；
『現代ドイツ短編集』（共訳）

DAS TAGEBUCH UND DER MODERNE AUTOR

Hrsg. von Uwe Schultz

© 1965 Carl Hanser Verlag, München

Japanese translation rights arranged
through Orion Press, Tokyo.

酷薄な伴侶との対話——日記と現代作家

エリアス・カネッティ，他

岩田行一／古沢謙次 訳

初版 1 刷 1983. 2. 10

発行所 財団法人 法政大学出版局

〒106・東京都港区南麻布2-8-4

電話03(453)0717／振替・東京6-95814

富士整版・印刷 鈴木製本所

© 1983 Hosei University Press

酷薄な伴侶との対話

日記と現代作家

エリアス・カネッティ，他

岩田行一／古沢謙次 訳

酷薄な伴侶との対話／目次

ヴォルフガング・ケッペン

不純な業務報告書 7

マリー・ルイーゼ・カシュニツ

記憶、鞭撻、芸術形式 29

ハインリヒ・ベル

見出し語〔日記抜粋〕 49

エリアス・カネッティ

酷薄な伴侶との対話 71

ギンター・アンダーズ

警告ポスター 103

ウルリヒ・ソンネマン

越境——警句集としての作業ノート

123

ハンス・ヴェルナー・リヒター

なぜ私は日記を書かないか

143

アルノー・シュミット

カケスの《チィッ!》、気圧一〇一四に降下

165

編者あとがき／ウーヴェ・シュルツ

191

訳注

195

訳者あとがき

201

カバー装画 浅見洪平

ヴォルフガング・ケッペン

*

不純な業務報告書

西ドイツの小説家。東プロイセンに生まれ、演劇学と哲学を専攻、演出家、ジャーナリストとして活躍しながらシナリオ、小説の創作を始めた。戦前すでに心理小説『不幸な愛』(三四)や第一次大戦後の社会の変貌を描いた長篇『ゆらぐ壁』(三九)を発表していたが、第二次大戦後、三つの長篇『草の中の鳩』(五一)、『温室』(五三)、『ローマに死す』(五四)の中で内的独白、映画のモンタージュなどの手法を使って歪んだ戦後社会を批判し、一躍注目をあびるようになった。中でも『温室』は亡命から戻った社会主義者を主人公に再軍備問題にゆれるボン政界の内面を描いて激しい論議をよんだ。その後の長い沈黙の時期に出版したソ連、アメリカ、フランスへの旅行記も、現代ドイツの模範的散文と高い評価を得ているし、最近の自伝小説『青春』(七〇)は彼の最も成功した作品といわれている。一九六二年ビュヒナー賞受賞。

日記と現代作家——この設問は単純にして複雑である。それはいったいどういうことだろうか、と私はよく考えてみる。作家は日記を書く。作家は日記を書かない。作家はおのれ自身のために日記を書く。作家はおのれの読者のために日記を書く。作家は同時代の人のために、もしくは後世の人のために日記を書く。作家はおのれの名声のことを思う。作家は死のことを思う。作家の遺稿のなかに日記が見つかる。作家の妻や姉妹や子供たちは仰天する。彼女らは当の日記を鍵をかけてしまいこみ、彼女らはそれを改竄し、それを加工し、彼女らはそれを汲みつくし、彼女らは金銭と出版者のせきたてとに屈する。日記は興味をひくか、もしくは日記は興味をひかない。日記は今日読まれ、もしくは百年後読まれ、もしくは一度も読まれない。日記は博士論文や参考文献や他の日記の執筆意欲をそそる。それは自明のことであるが、きわめていかがわしいこともある。

私はこの件について意見を述べるように言われている。私にはその答えが分かっているのか？ 私はその適任者なのか？ だいたい私は自分を質問に答えるのに適任な者とは決して思っていない。むしろ私はいろいろ質問することならできるのだが。そうした質問には誰かある人がいつか取りくんでくれるだろう。いま私はある関係を熟考するという腹だたい状況下にあるが、この関係は私にかかわらないし、私にきわめて深くかわるし、今日は私にとってどうでもよいが、しかし昨日は私にとってどうでもよくなかったし、明日は私にとってどうでもよいが、もしくはどうでもよくないだろう。

当の問題はそれに取りくむことを何びとも強制しない。それは周辺的な問題であり、しかもあらゆる作家の核心的な問題である。それは仮に討議されたならば、著述家たちや教授たちや若い人たちや相当な地位にある紳士淑女や老人たちといった読者層のつかのまの好意的な注意をひくだろう。

彼らはたぶん自分の書庫もしくは公共図書館でいろんな実例を探さだろうし、自分の意見をもつだろうし、私に賛成するか、もしくは反対するだろう。ことさらに賛成もしくは反対を招くようなことをするのが私の職業の不幸なのである。自分を不安にするもの、自分に希望をいだかせる僅かなものを私は市場へ売りに出している。私は生涯の終りにのぞんでもなお何ら得心のいくところがないだろう。現代作家とは誰のことなのか？ おおかたの著述家は生きていたとき、もしくは死後の名声を得たときも現代作家ではない。しかし仮に著述家たちが電光のきらめきにも似たほんの一瞬の間だけ現代作家であったのなら、彼らはあらゆる著作が忘れさられてしまうまで、何千年にもわたって依然として現代作家であるだろう。人がいま私のことを見聞するかもしれないからといってただそれだけで私がとりもなおさず現代作家だということにはならないのである。ここにひとつの陥穽があるが、私はそれにつまずいたりほしめないだろう。最新の情報は現代的ではない。では現代的とは何を意味するのか、現代作家の指標にはかならない現代的なものはどのように測定され、計量され、分析されるのか？ あるのは、正しくない物差し、破損した分銅、分離しない硝酸、新星もしくは彗星によって

偏光させられ、目には見えぬながら我々の意識と無意識のなかへいよいよ深く押しつけてくる諸光線によって眩惑された批判的な観察者たちの眼なのである。一部の人たちはひとりの現代作家をつかまえたと思ひ。彼を何トカ賞に包み、彼らが連れていきたいと思うどんどこころへも、つまり彼らのサロンや演壇や屋上庭園やベッドへ彼を連れていくが、当の作家は口をつぐんでいる。祝賀会に招かれた客たちは期待を裏ぎられて彼は本物だろうかと疑う。専門家の鑑定などはいえぬ。よしんば専門家の鑑定があるとしても、誰が当の専門家のことを保証できるだろうか？ 私が当てにできるのは、ただこのテーマに対して一種の勘があるということだけである。私は自分ひとりを頼りにするほかない。それが唯一可能なことである。私は現代作家の祖先のギャラリーを見る。そのなかでは曾祖父は孫に、祖父は息子に、父は彼らの各自に、現代作家自身に、他の全員の総和にはかならない。現代作家とは現代作家たちの精神のエキスである。それはその通りであるがナンセンスでもある。現代作家はつねに一匹狼である。彼はおのれ自身と、神と、天地創造と争い、神と天地創造とに対するおのれの争いと争う。私はウヅの地⁽¹⁾にひとりの現代作家がいたと言っているのである。さてそれは日記のなかの一片だろうか？

そもそも日記というものは、現代作家の日記とは何か？ それは練習帳ではないし、表紙に図案化した活字で描かれたり金文字で浮き彫りにされたりした《わが日記》というタイトルのある特製本で

もない。ある現代作家の日記は日記として記されることもあるが、しかしそれはまた一枚のメモという形式をとることもあり、当のメモは書かれはしたもの、あるいは、どこかあるところで、つまり旅先で、逃亡中に、無為のうちに、出征中に、カフェーで、道端で、夜ベッドのなかか橋のしたで、不渡り小切手よろしく振りだされたまま、なくなってしまったかもしれないし、その記録は牢獄の壁に書かれていることもあるし、それはおのれ自身の血で書かれたり玉座のうえで記されていたりすることもあるし、それは尊重されたり軽蔑されたりする書、葬られたり神聖視されたりする文書となるだろうし、それは教化に、ときおりは不法行為に役だつかもしれないし、それは小説や哲学や詩やそれどころかドラマであって差しつかえないのである。現代作家の日記は彼の作品、彼の全集である。それは彼が書いてきたし、提示しなければならぬし、生きてきた総体にはかならぬのである。ドストエフスキーはラスコーリニコフでもあった。ドストエフスキーは告白や懺悔や信仰告白を愛した。彼は『地下生活者の手記』、『死の家の記録』、『冬の記録』を書き、あらゆる小説のなかで懺悔や信仰告白や告白や手記や日記を書いた。

ウヅの地にひとりの男がいた。へわが心生命を厭う。然ば我わが憂愁を包まず言あらわし、わが魂神の苦きによりて言わん……⁽³⁾ ヨブ記は私にとって現代作家のためのすぐれた手本である。それは、私の知るかぎり、最初の文学的自己分析、最初の自己暴露、告解者と聴罪司祭との関係を意に介さな

い最初の懺悔、おのれは誰か、おのれはどこにいるか、おのれは誰に依存しているか、おのれを待ちうける運命は何かといったおのれ自身の立場を認識せんとする最初の試みである。ヨブ記は現代作家の日記にとって嚮導的、特徴的であり、まったく典型的である。それはまた美しいし、非痛きわまりないほどに美しい。もっとも私はヨブ記を美しいと呼ぶことにはためらいを覚える。美しいという言葉はあまりにも多くの意味を有しているし、現代作家の日記はありふれた慣用的な意味においてはいささかも美しくないからである。それにもかかわらずヨブ記は、私の言う意味において、つまり私が証^{あかし}と考えるものがすべてそうであるように、美しい。ヨブはたしかに恐れとおののきからあれこれ考え、疑惑と絶望から結論を引きだそうと試み、その結果おのれ自身の実存を自覚し、当の実存を問題化している。ヨブはさまざまな推測を書いているが、それもまた死へと、しかもつまずきの道へと通じている。ヨブはおのれ自身を厳しく責めたてるし、おのれが理解しがたい諸法典を備えた拙^{つた}い裁判官であることを知っている。みずから原告、被告、証人をも兼ねる裁判官は立法者に反抗するが、一天にわかにかき曇って雷鳴がとどろくと愕然とする。どうして彼は愕然とせずにいられよう。彼は生のなかへ投げこまれ、地上に縛りつけられ、地上の諸力の手に委ねられている。策を弄しさえすればもろもろの危機を免れる可能性とてなきにしもあらずだったろう。思索や経験や知識を動員すれば自己を主張する好機を逸することはなかったろう。しかし、かてて加えて思索とは経験や知識や進歩を

美しい惑わしのなかに数えられている何ものかである。では当の苦難をいやす薬はどこにあるのか？信仰か？ 感覚は信仰を強めることも弱めることもできる。仮にほんとうに単純な者たちがこのうえなく幸せであるとしたら——単純さは学べるだろうか？ 善悪を知らぬ者として創られた人間は善悪を知る樹の果を食ってしまったのである。ヨブのクロニクルは内面への光であり、後代の彼と同じように魂を震撼させられた者たちのあらゆる証のように、場所と歴史的な時間を何びとにも識別できるような言葉であらわすことを断念している。ヨブが提示するのは、社会的ならびに政治的な事実の記録でも、忘却しないための覚え書きでも、伝記という記念碑のための石材でもなければ、《主の日、雨なり、鑄掛け屋と朝餉をはむ、扁豆の羹、ノアの葡萄酒出づ、互いに十誠につき語りあう》といった空疎の支物でもない。現代作家の日記はカレンダーではないし、一日、二日、三日、最後の審判の日といった日付を記さない。日記はヨブによって創始された対話であり（カインは著述家ではなかったし、行動人であっておのれの流儀でくだんの問題を解決した、と言うかむしろそれを信じてそれを解決しなかった）、作家がおのれ自身と、もしくは神と、もしくは神に対するおのれの絶望とかわす対話にはかならない。この対話——本来はおおむねモノローグ——はこの世界の破滅する日まで、あるいは我々の想像力を越えるかもしれぬほどなお長く久しく、続けられることだろう。ヨブは多くの名前をもっているのである。

マルクス・アウレリウスは現代作家だったろうか？ 彼は現代作家だった。彼は『自省録』を書いたのである。

アウグスティヌスは現代文学の、つまり日記や作品の重荷を次のたったひとつの命題に集約している。《私自身さえおのれの存在の全体を把握してはいない。》^{こた*} 荷が帰ってきた。デカルトは《我思う……》と書いたし、ランボーは《何ものかが私のことを考えている》と書いた。キルケゴールは《絶望と罪とのあいだの弁証法的な限界領域としての実存》を把握した。

現代作家たちの日記からの若干の引用。《いったい私の心は人間の心ではないのか？》——《まだ私は愛すべきいかなるものも有していなかったが、しかし私が愛していたのは愛そのものであったし、心の奥深くでは愛を求めていた私は、自分がほとんど愛に飢えていなかったために自分を憎んだ。私は愛することに夢中になりながら自分に愛せるようなものを探しもとめ、安全な安らぎを憎み、陥穽のない道を憎んだ。》——《詩人的実存それ自体は闇に包まれているが、それは絶望が貫徹されず、魂がたえず絶望裏におののき、精神がおのれの真の認識を獲得しえないことの結果だ……》——《つまり絶望は、まさにそれがまったく弁証法的であるからこそ、一度もかからなかったことが不幸とみなされるような一種の病いなのだ。》——《人知れず静かな海にたゆとうこの美しく大きな船たち。このおおらかで、はるかな土地にあこがれている堅牢な船たち、彼らは黙せる言葉で私たちに語りかけ